

# 教宣 せぶん

## 心のゆたかさは 顔に出る

「ボロは着てても心の錦 どんな花よりきれいだぜ」という水前寺清子の唄がありますが、ご存知でしょうか？ 身なりは粗末の物をまとっていても、自分に正直に、真っ当に生きていれば、その人生はゆたかで、金には代えられない価値があるという意味だと思います。「清貧の思想」と呼ぶものです。手前ミソかもしれませんが、合併が発表されて以来、資金が乏しい中、長いものに巻かれず、「おかしいものをおかしい」と言い続けてきた私たちのたたかいや足跡は、まさに「清貧の思想」と呼べるものだと思います。

人の生き方とか、心の状態というのは、おもしろいもので、必ず顔や表情にあらわれると思います。理屈ではなく「感性」なのでうまく表現できませんが、人を見た時に「いい顔しているな」とか「親近感がわくな」と感じることは誰しもあると思います。パーツの問題ではなく、心から滲み出てくるオーラのようなものが、表情にあらわれるといった感じです。後でそういうインスピレーションを感じた人の生き方とか考え方がわかると、やはり共感できたり、感銘できたり、尊敬できたりすることが多いものです。私は今回のたたかいを通して、最初に私たちの弁護団の先生の顔や表情を目にした時に、この「親近感」をインスピレーションとして感じました。立場の弱い者の側に立って、巨大な資本とたたかっているという「清潔さ」「純粹さ」が、「表情」にあらわれていたのだと思います。

「清貧の思想」とまったく逆な生き方をしているのが東海経営です。宝飾品を身にまとい、外見を着飾り、外に向かつてはとても立派なことを言う。しかし、外から見えないところは「嘘」や「偽り」で固め、自分にとって都合の悪い者を、いかに法に触れないように、追い出すかを考えています。うわべだけを取り繕いさえすれば、何をやってもお構いなしという考え方です。テレビや衛星放送に登場する東海経営は、一見、物腰が低そうで、柔和そうで、穏やかそうな語り口で話をしていますが、合併以来、この東海経営のやり方を「特等席」で見てきた者にとっては、すべてがパフォーマンスとしてしか映りません。すべてが虚像にしか見えません。悲しいかな、その顔や表情からは心のゆたかさを感じとることができません。

当たり前のことかもしれませんが、先日の法廷で、デタラメ感さえ覚えた「答弁書」を提出した会社側弁護士の顔や表情からも、「親近感」や「清潔さ」「純粹さ」といったオーラをまったく感じませんでした。その表情の中に、直感的に「嫌悪感」を覚えてしまったのは、私だけではなかったようです。「類は類を呼ぶ」ということでしょうか。